

水稻ヒコバエがニホンジカを養ってしまう

～なんにもしなければ、飼ってるも同然でしょ！～

辻井 修（新城設楽農林水産事務所農業改良普及課）

【平成26年4月15日掲載】

【要約】

新城設楽地域の収穫時期及び標高が異なる水田で、ニホンジカの餌となる水稻収穫後のヒコバエの発生状況を調査した。その結果、収穫時期が早いほ場、標高が低いほ場ほど発生量が多く、ニホンジカを誘引して採食させる可能性がより高いと考えられた。対策としては、地域ぐるみで水稻収穫後すみやかに耕起することが重要である。他の作業が競合して難しい場合もあるので、早生品種は山林から離れた水田で栽培する、収穫後も電気牧柵を通電しておくなど、様々な手法を組み合わせた対策が求められる。

1 はじめに

野生獣による農業被害対策は、環境整備、物理的な防御、捕獲が対策の三本柱といわれる。とりわけ環境整備は、野生獣を集落に誘引する要因をできるだけ取り除くため最優先に実践すべきであるとされるが¹⁾、地道なうえ効果が実感されにくい活動である。集落住民の意欲を引き出すために、まずは誘引要因の問題性を明確にすることが重要である。

水稻収穫後の切り株から発生するヒコバエは、野生獣の誘引要因のひとつであると指摘されている²⁾。そこで、新城設楽地域におけるヒコバエ発生量を調査し、ニホンジカの誘引や養育に与える影響について評価を試みた。

2 調査内容及び調査方法

新城市2か所、設楽町2か所の合計4か所を調査ほ場とし、栽培品種、移植日、出穂日、収穫日を聞き取った（第1表）。収穫後のヒコバエ発生時期（10月17日）に草丈及び坪刈りによる生草量(kg)を測定し、10a当たりの推定発生量(kg)を算出した（写真1）。

第1表 各調査ほ場の条件

	新城市		設楽町	
	作手地区	鳳来地区	名倉地区①	名倉地区②
品種	ミネアサヒ	ミネアサヒ	あきたこまち	チヨニシキ
標高(m)	516	228	652	652
移植日	5月6日	6月9日	5月8日	5月5日
出穂日	8月17日	8月20日	7月28日	8月6日
収穫日	10月1日	10月6日	9月14日	9月24日



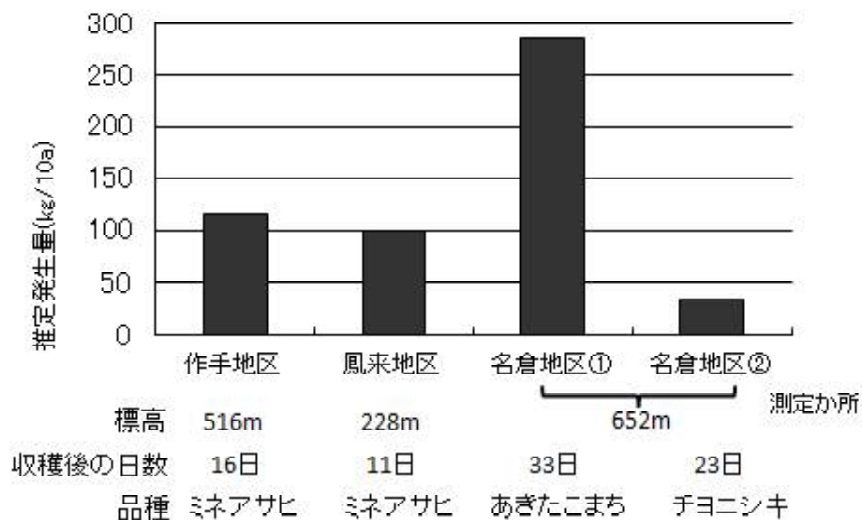
写真1 調査ほ場の様子（作手地区、左：移植直後、中央：出穂時期、
右：坪刈りによるヒコバエ発生量の調査）

3 調査結果

同じ品種を栽培した作手地区と鳳来地区を比較したところ（写真2）、収穫後の経過日数が5日短い鳳来地区（標高228m）において、作手地区（標高516m）とほぼ同等の推定発生量であった（第1図）。名倉地区①、②は隣接しているが、①では早生品種「あきたこまち」が栽培され、収穫後の経過日数の違い（10日間）により推定発生量に約8.4倍の差が生じた（第1図）。



写真2 坪刈りしたヒコバエ（左から作手地区、鳳来地区、名倉地区①、名倉地区②）



第1図 ヒコバエの10aあたり推定発生量
（10月17日調査）

4 考察

最も早く収穫された名倉地区①の「あきたこまち」でヒコバエの発生量が特に多く、収穫後の経過日数が10日短い隣接ほ場（名倉地区②）の「チヨニシキ」に比べ、発生量は8.4倍であった。ニホンジカは警戒心が強く、見通しが利くところを数100m以上移動することはまれだといわれるため、「あきたこまち」のような早生品種はできるだけ山林から離れた水田で栽培することが望ましい。

新都市の調査ほ場（作手地区、鳳来地区）はともに「ミネアサヒ」が栽培され、収穫後の経過日数は鳳来地区の方が5日短かったにも関わらず、発生量は大差なかった。標高が低く収穫後も比較的高い温度条件が続く地区では、ヒコバエがより問題となりやすいといえる。

実際に各調査ほ場では、ニホンジカがヒコバエを食べたと思われる痕跡が確認された。ニホンジカが出没する地区では、収穫後の水田の早期耕起推進が重要な対策になると考えられる。なお、ロータリ耕ではヒコバエが再発しやすく効果が不十分で²⁾、ボトムプラウによる反転耕が望ましい。

しかし、水稻栽培では9～10月にかけて収穫作業が忙しく、全ほ場の早期耕起は作業的に無理がある。そこで、山林に近くニホンジカが入り込みやすそうな水田を選択的に耕起するなどの工夫が必要である。また、すぐに耕起できない水田では、ヒコバエが枯れる時期まで収穫後も電気牧柵に通電しておく、晩生品種の栽培を割り当てるなど、様々な手法を組み合わせた対策を検討したい。

ニホンジカは、エサが豊富で栄養状態が良好になると繁殖性が向上して個体数が増加し、やがて地域の植生を破壊してエサ不足となり栄養状態が低下するというサイクルを繰り返す³⁾。よって栄養価が高い水稻ヒコバエは、まずは周辺山域全体の生息密度を上げる要因となり、いずれ農作物への被害のみならず山林も含めた地域全体の自然環境を大きく損なうおそれがある。たかがヒコバエと侮ることなく、地域ぐるみで対策を進めていく必要がある。

5 引用文献

- 1) 小出哲哉(2011). 知ってとくとく獣害対策(イノシシ編)～集落ぐるみで「引き寄せない」、「入らせない」、「捕まえる」を行ってイノシシに勝てる集落になろう!～. 愛知県公式ウェブサイト「ネット農業あいち」(平成23年9月20日掲載)
- 2) 森茂之・山中成元・河村久紀(2011). 水稻ヒコバエの生育と野生獣による採食の実態およびその生育量を減らす営農管理技術. 滋賀県農業技術振興センター研究報告第50号
- 3) 浅田正彦(2013). 千葉県におけるニホンジカの捕獲状況および栄養状態モニタリング(2011年度). 千葉県生物多様性センター研究報告第6号